

記録史料レスキューボランティア参加記

富 善 一 敏

はじめに

筆者は昨年 3 月 11 日に起き、決して忘れることのできない東日本大震災で甚大な損害を被った記録史料（公文書・古文書等の一次資料、アーカイブズ）のレスキュー活動に、ボランティアとして 2 件参加した。以下の小文ではその概略を紹介し、若干の感想を述べたい。

1. 公文書：岩手県釜石市役所行政文書レスキュー

今回の大震災で発生した津波により、被災地域では広範囲にわたり公文書（行政文書）が被害を受けた。釜石市役所では、段ボール 1,000 箱（推定 2 万点）にのぼる書庫内の行政文書が水損被害を被った。国文学研究資料館のチームが救済活動に当たり、現在なお継続中である。詳細については青木睦・西村慎太郎両氏の論考¹を参照されたいが、ここでは筆者が直接携わった救済活動について述べることにする。

東日本大震災から 2 ヶ月近く経過した 4 月末以降、文化庁文化財等レスキュー「人間文化研究機構内チーム国文学研究資料館」は、2011 年度人間文化研究機構連携研究「大規模災害における資料保存の総合的研究」（研究代表者国文学研究資料館准教授・西村慎太郎氏）の一環として、釜石市役所行政文書のレスキュー活動に当たっていた。釜石市役所第一庁舎の地下書庫で津波の被害を受けた行政文書は、倒壊した書架の簡単な現状記録（写真撮影、簡易スケッチ、内容の簡易把握）の後、

簿冊数冊毎にビニール袋に入れられ、地下書庫のすぐ近くの仮置き場に搬入されていた。筆者が参加した 2011 年 6 月の段階では、仮置き場から避難所でもある旧釜石第一中学校への搬送と初期乾燥作業が進められていた。

筆者は、東日本大震災後、歴史資料ネットワークや知人を通して、被災地の記録史料が蒙った甚大な被害状況を仄聞してはいた。しかし、職場の復旧作業や日常を取り戻すことに追われ、また東京という被災地からやや離れた地域に居住することもあり、全国歴史資料保存利用連絡協議会の文化財等レスキュー要員リストには登録していたものの、実際の救済活動にはなかなか足が踏み出せずにいた。

5 月 30 日に安藤正人氏（学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻教授）から、6 月初旬に行われる釜石市役所での集中救済作業に際し、文化財等レスキュー専門スタッフ募集の案内があった。家族と相談して、6 月 4～6 日の 3 日間参加することにした。すぐにボランティア保険に加入し、安全靴など装備を整えた。ボランティア活動計画書を職場に提出し有給休暇を取得し、3 日夜上野駅前で釜石行きの満員の夜行バスに乗車した。

6 月 4 日朝釜石市役所に到着し、簡単な自己紹介の後に搬出班・乾燥班・内容リスト作成班の 3 班に分かれて作業を開始した。筆者は搬出班であった。簿冊を数冊入れたビニール袋をリヤカーや台車に積み、チーフ林貴史氏（元埼玉県白岡町職員）の指揮の下、数百メートル離れた旧釜石第一中学校校舎の 3 階

及び4階の乾燥場所に搬入する作業を繰り返した。想像以上に身体を使う作業であり、水分補給と十分な休憩を取りながらではあったが、夕方5時までの作業が終わると心底疲れた。国文研スタッフの厚意で近くのビジネスホテルに宿泊することができ、美味しい食事をいただくことができた。翌5日も同様の作業をし、6日午前中に地下書庫内に残る行政文書の現状記録作業を行った後、午後帰京した。なお公文書を取り扱うため、守秘義務に関する誓約書を釜石市へ提出した。



写真1. 幟へのサイン

3日間の作業で印象に残ったのは参加メンバーの頑張りである。搬出班は前述の文化財等レスキュー専門スタッフ、山形文化遺産防災ネットワーク、釜石市登録ボランティア(経団連募集の会社員や現地の方など)、国立国会図書館、首都圏の大学やアーカイブズの職

員・教員の寄り合い所帯であり、人員は毎日入れ替わり20名ほどであった。朝8時半の全体ミーティングの後、夕方5時まで作業が続く。休憩時間にペットボトルの水を飲みながら色々なことを伺った。朝山形の自宅や花巻の宿泊地から車で来て、夕方には帰るタイトな日程をこなすメンバーたち、各班の作業を無駄なく進行させるチーフ、全体を統括し食事や宿の世話にも当たる指導者青木睦氏のおかげで、集中搬送と初期乾燥の作業が滞りなく進んだ。多くのことを学ばせていただいたことに改めて感謝の意を表したい。最終日に「釜石」と大書された幟に日付と自分の姓名を記せたのは(写真1)、未熟な自分にとってささやかな誇りである。

また、被災地へ行って初めて分かることがある。津波の被害の大きさはマスメディア等から承知していたつもりではあったが、その凄まじさは想像を遙かに超えるものだった。釜石市役所のすぐ前の空き地には、大震災から3ヶ月近くたった当時でもなお、ガレキが山積みされていた(写真2)。帰宅から二三日は、東京が別世界のように身体がフラフラし、夢に倒壊した釜石市街地の目抜き通りの光景が出てくるほどであった。



写真2. 釜石市役所前のガレキ

2. 民間資料：茨城史料ネットレスキュー

2011 年 11 月 19・20 日の両日、茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会（略称茨城史料ネット）の資料レスキュー活動が、資料の一時保管場所である北茨城市華川公民館分館で行われた。茨城史料ネットは 2011 年 7 月 2 日に茨城大学で開催された、茨城県内の被災資料救出活動に関する緊急集会で設立され、県内の文化財や歴史資料の救済活動に当たっている²。

筆者は 7 月に茨城史料ネットにも加入した。しかし諸雑事にかまけ幽霊会員の状態が続いていたが、重い腰を上げて参加することにした。11 月 19 日朝 9 時過ぎ、上野から特急で 2 時間近くの常磐線磯原駅に到着し、山あいの一時保管場所で作業を始めたのは午前 10 時、終了は午後 4 時（作業場所に電気がなく、夕方には暗くなってしまう）であった。2 日で実働時間は約 10 時間、参加人数はのべ 40 人である。19 日は救出した資料の所在地である北茨城市平潟の民宿に泊まったので、翌朝に白井哲哉氏（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科准教授）の案内で、現地の被災状況を垣間見ることができた。20 日の朝 10 時頃には震度 5 弱の地震があり、一時屋外に避難した。

今回の作業対象は、北茨城市平潟で損壊した土蔵から救出された水産業者の資料であり、文書史料・書籍・民具類からなる（写真 3）。白井氏及び茨城史料ネット事務局の山川氏から作業手順について詳細な説明を受けた後、3～4 人の班に分かれて作業を行った。まず資料収納容器の写真撮影とスケッチ・採寸（専用の現状記録用紙を使用し、箱書きがあれば記録した）を行い、まとめり全体の情報を記録する。記録後ブルーシートに資料を 1 点毎

に並べ写真撮影を行い、専用の資料目録用紙に表題・年代などの必要事項を記入する。また現段階での資料の評価（今後保存するか廃棄するかを判断）を行い、保存を必要としない資料は別置した。文書資料は中性紙封筒に入れ換え、文書保存箱に収納した。2 日間の作業で、救出した数十のまとめりの大部分の調査が終了した。

次に若干の感想を述べたい。アーカイブズ学的段階的史料調査論の立場からは、今回の作業は概要調査（収納容器毎の記録化と資料内容の把握）の段階に当たる。ヒト・カネ・ハコ・時間等多くの制約の中で、妥当な内容であったと感じた。これまで茨城史料ネットにより行われた巡回調査（資料の所在確認）、9 月に行われた蔵出し（資料収納状況の記録化と搬出）なしには行えないものであり、関係者の方々、とりわけ地元で多くの労を取られた山川千博氏の努力に改めて御礼申し上げたい。個人的にはこれまで各地で経験してきた概要調査の作業スキルをそのまま生かすことができ、少しは貢献できたかもしれない。

若干問題を感じたのは、文書資料以外の民具類の扱いである。今回レスキューした資料の今後の保存の見通しが不透明な現在の段階では、保存スペースの問題もあり、ある程度の評価判断をせざるをえなかった。しかし私自身は日本近世史を専門としており、民具類の価値を評価するのは正直行って荷が重い。民俗学の専門家の参加の必要性を痛感した次第である。それでも、今回作成した現状記録写真や資料目録の成果に基づき、行政や地域に適切に働きかけることができれば、状況が変わるかもしれない。事態の推移を見守るためにも、今後とも茨城史料ネットの活動にかかわっていければと感じた。

最後に、調査場所やトイレへの送迎、食事の手配など繁雑な事務を担っていただき、暖かく迎えていただいた茨城史料ネットの皆様、旅費の一部援助の労を取っていただいた歴史資料ネットワークの添田仁氏、畏友白井哲哉氏に感謝の意を表したい。



写真 3. 整理作業前の資料

むすびにかえて

以上、東日本大震災で被災した公文書（行政文書）と民間資料の2例について、筆者が経験した史料レスキュー活動について述べてきた。史料の救済活動は、記録史料にかかわるなんらかのスキルがあるのが望ましいが（勿論なくても可）、現地でしか学べないことは必ずあり、できるだけ現地へ行くのが望ましいことを述べて、この拙い参加記の結びとしたい。なぜならそれは、これから数十年のスパンで続く息長い活動であるのだから。

(2012年2月17日記)

(とみぜん かずとし：東京大学大学院経済学研究科学術支援専門職員・経済学部資料室員)

¹ 西村慎太郎「災害レスキューから見えたこと」『第37回全国歴史資料保存利用連絡協議会全国（群馬）大会』, p.67-72. 2011.10、青木睦「東日本大震災における津波被害の歴史文化情報資源のレスキュー」『PASSION』33, 2011.11。

² 茨城史料ネットの活動に関しては、白井哲哉「『茨城史料ネット』の設立と資料救済活動：3・11から7・2へ」『歴史学研究』884, p.30-32. 2011.10、同「茨城における大震災被害と歴史資料の状況」『関東近世史研究』70, p.62-63. 2011.10、白井哲哉・高橋修・山川千博「茨城県内の被災資料救済・保全活動」『日本歴史』762, p.84-90. 2011.11、高橋修・高村恵美・山川千博「茨城県内の文化財・歴史資料の震災被害と救済活動」『歴史評論』740, p.74-85. 2011.12、及び茨城史料ネットホームページ <http://ibarakishiryoku.web.fc2.com/> (参照日 2012-2-12) を参照されたい。